

好意は謹んで感謝申上る次第である。内地に於ける沿道の諸學校の方々にも併せて、御禮申し上げたい。更に更に大書して感謝の辭を呈さねばならないのは、山崎直方博士が、西京丸其の他に於て恰かも十年の師弟の如き、温き親切なる御指導をたまはつた事である。永く山東旅行の思出と共に、寫生ブック、日記帳、旅行記等に於て記念すべき事である。この約一月の旅行に於て、益せしところを挙げつくす事が到底出来ないが、海にしたしみ、海路に怖れず、外土に感興をいただき、更に遠隔の旅行を欲すといふ如きは、女子として、誠によい結果を見た事と、我ながらよろこばしい極みである。

文科三年日光旅行

大正七年十月二十七日未明に上野を出發した日光行列車は、我等一行の喜を載せて幾年來の憧憬の的へと疾走した。しらしらと明るみ行くにつれて、雨模様が見えてきたが、日光旅行には雨がつき物と何時となく聞かされてゐたので、覺悟もあり、準備もあ

り、失望はしなかつた。やがて雑木林の紅葉を洗つて落ついた雨が降りだした。日光に近づくにつれて彼の有名な老杉の並木が見られた。汽車はその並木の街道を横ぎつて、小綺麗な明るい停車場に着いた。時は十時半頃であつた。

初めて見た日光の町は、實に汚ないと思つた。しかし電車が進むにつれて、此感じは消えて行つた。町が盡きると、神橋の架せられた溪流が顯はれて來た。皆是東照宮拜觀の爲、此處で降りた。神橋の所で迫つてゐる谷が向ふに開け、上流の方にも、下流の方にも、白雪を頂いた山々が見えた。日光のシムボルの如く、目も覺めるやうに鮮かであるべき神橋は、修繕中で惜しい事にもよく見えなかつた。

參道と札が立てられた杉並木の坂を登りきつてから拜觀切符を買つて、山内に入つた。先三佛堂（輪王寺金堂）に入つて行く。大きな紋付羽織を着て、小旗を持つた案内者が、此處で先口を開く。彌陀を中央に、右に馬頭、左に千手觀音の三佛が安置されてゐる。堂前の大きな糸垂櫻の傍を通つて、大師堂前に出る。泉石の配置の綺麗な庭があつた。左して、相輪

塔の下に立つ。東照宮の鬼門に當り、鎮護の爲に建てられたものと云ふ。其處を下りて、本通りに出る。やはり立派な杉並木があり、其の正面に東照宮の堂守が有るのであつた。

石の大きな華表をくゞらうとした時に、黒田長政が筑前から石を運んで奉つたものと、案内者が説明した。左に濃緑の中に、丹青を凝らした五重の塔が見えた。雨の爲に、その色彩が一層はへて見えた。水盤所では「まわこんな處まで、こんなに立派にね！」と、つぶやく人もあつた。御手洗器からは、清水が絶えず漲り落ちてゐた。南蠻鐵の燈籠を見、唐銅の華表を通ると、飛越の獅子がある。諸大名の献納した燈籠が澤山ある。そして其の前には、陽明門が花を開いたやうなきらびやかな姿を見せて立つてゐる。

此前を通つて、先に本地堂に入つた。權現様のお守り本尊藥師佛を祀つてある所。内陣に入つて手を打つて「ロ、ロ、ロ」と響く鳴龍の聲を聞いた。天井に繪いた大龍の頭の下で、打つたのでなければ、鳴かないと云ふのであつた。

それから陽明門の前に戻る。三門樓門入母屋四方

軒唐破風の建築は、雨の中にひとしほ輝いて立つてゐた。實にこれなら、日を暮して見續けても、飽きまいと思つた。十二本の中、一本の柱は逆ばしらと云つて、地紋の渦流が皆下をむいてゐる。凡て調つたのは魔がさす故に、魔除けの爲にかうしたのでと案内者は云つた。先生は「し損ひだらうよ」と云つて笑つてゐらした。「東照大權現の御額の字は後水尾天皇の御宸筆。天井の八方睨の龍は狩野探幽の筆、左右の御廻廊は百間」などと、案内者の雄辯が流れる。御門は勿論、廻廊の極彩色彫刻も、實に偉觀また美觀であつた。其の奥に、四方大唐破風で二脚門なる唐門がある。一層陽明門よりは小さく、美しさも劣らず、殆んど手に載てせ見る精巧な細工物が、お菓子やうな氣がした。陽明門の彩色とりどりに、華やかなのに比して、あつさりした色彩と、金金具の輝きとがまた美しい。

此處を入ると拜殿になる。其の裝飾がまた、美をつくし、麗をきはめたと云ふ感じを起こさせる。拜殿からお石の間、それから奥の院に續いてゐる。座つて神主の説明を聞いてから、此の善美をすくした

中に、濡れた體を置くのを氣づかひながらも、二重合天井や、襖に畫かれた精巧を極めた繪畫に見とれ堆朱の卷柱に驚いた。兩側に重く垂れた簾の中は、一方は將軍御成の座、一方は御門主の御着座であつた。之も亦薄暗い光線の中に、贅を極めた裝飾が、壯嚴に施されてあつた。

惜しみつつも此處を後にし、神輿舎の前を通り、猫門の下に立つ。左甚五郎が精をつくした彫刻、牡丹花の中に眠る猫は、寛永の昔から猶幾年の星霜を觀客の前に安らかな眠りを續ける事であらう。

東照宮を出て西すると、二荒神社がある。日光でも一番古い社で、日光山の開山、勝道上人が創建したのを、此處に移したのである。東照宮の華麗に馴らされた目には、質素に神さびて見えたが、やつぱり朱の色は美しかつた。拜殿の次に唐門、次に本殿となる。唐門の前に、國寶の化燈籠があつた。千年餘を経たものである。

二荒神社の前を下りると、右に三代廟大猷院の入口の門が見える。東照宮と同じく、金碧燦爛たる殿堂である。東照宮は寛永元年に改築を始め、十三年

かつた。然し實に、美麗であつた。そして此點に於て、殆んど絶頂であつた。其處にまた日光廟建築の主意がうかがはれるのである。
中禪寺行き。

馬返しの茶店で準備をして、中禪寺への登り路についた。馬返しから少し行つた所にある溪流は、實にすぐれたものであつた。幸橋、榮橋、三澤橋と云ふ三つの橋が續け様にあり、それから葛折の坂道が續く。紅葉の山、大谷の清流、佳境は佳境に續き我等を喜ばし驚ろかすのであつた。

劔が峰からは、方等般若の瀧がはるかに見えた。余程登つた或坂の曲り角では、山は錦の様に色ざられた底の方に、流れが白銀を流したやうに見え、或所では男體の雪を頂いた雄姿が、すぐ頭の上にあつた。雨はちつとも苦にならず、道はよし、景色はよし、こんな楽しい山登りは、またとあるまいと思つた。

中の茶屋では、大谷の瀧が下で遠く鳴つてゐて、右には阿嚴の瀧が、細く谷間にかかつて見えた。此の邊から、次第に暮れかけたが、伊藤屋の出向ひの提

間を費して落成したのであつたが、家光の薨じた時には、東照宮造營の工匠が多く生存してゐたので、慶安四年から承應二年まで三年ばかりで落成し、前者に劣らぬ、立派なものができ上つたのである。二王門、寶庫、御手洗水盤、二天門と云ふ順になつてゐる。夜叉門は、東照宮の陽明門と云ふ位置にある。左右にある四夜叉の彫刻は、世にきこえてゐる。其の奥に唐門、其の奥に拜殿がある。皇嘉門から奥殿への石段を登る。拜殿などの華麗に引きかへ、色彩のない圍の中に、墳墓が靜に造られてあつた。突如として、寂寞と哀愁の感が迫つてきた。雨はなほ小止みもなく降り續けてゐた。

三代廟を出てから、日光寶物館に入つた。大正四年に造營されたもので、日光中の寶物を集めてある。急ぐので、陳列の前を素通りにしたので、惜しかつた。配列のいゝのに一同、感心してゐた。

かうして午後三時には、もう馬返し行の電車の中の人となつた。日光の堂宇はその金碧色彩が新しく、鮮かに輝がやいてゐて、幽遠の趣があるとは云へなかつた。またその規模に於て、壯嚴偉大とは云へな

灯が見えてから、一同の元氣は更に増した。「もう直ぐですか。」「まだ湖は見えませんか。」と番頭に聞きながら行く。やがて道は山を出て、白樺のまじつた林の中に入つた。華嚴への道が、直ぐ近くにあると聞いた。間もなく一行が湖畔の旅館に靴の紐を解いたのは、午後六時半頃であつた。

硝子戸越しに湖水の見える二階に、我等の室がしつらへてあつた。かうして讚美の一日が終つた。誰も誰も昂奮しすぎて寝にくい様子であつた。

二十八日。朝霧を通して美しい曙光がさし初めた頃、歡喜に充ちた人々は、もう湖畔の逍遙に出かけてゐた。レーキサイドホテルの前から見た東天の色彩の美しさ、その變化の見事さ、そこにはまた白雪に旭を受けた白根の雄姿が見えた。それから名々は林の中の道を通つて、華嚴の瀧の方に下りて行つた。上の茶屋から少し下りて行つて、柵に凭つて下を覗いた。誰も先「あゝ」と感嘆した。さすが華嚴は名瀑だつた。水が落ちるやうには思へなかつた。一瞬間を見ると、雲をちぎつて懸崖に引き掛けたやうでもあつた。けれどもそれが瀧壺に落ちる所は、實に

凄まじい、天崖から大鐵槌を突つ込むやうな勢である。瀧壺は底知れぬ深い碧を湛へてゐた。瀧の繁吹きの散る邊りに、美しい虹がかかった。此でも亦我等は讚辭の有りつ丈を呈してきたのである。

此の日は湯本に行つて歸る豫定であつた。舟三つに乗り込んで、宿の前から出た。あの憧憬してゐた中禪寺の湖に舟を浮べてゐるのだと思ふと、全く我等は幸福であつた。帆は風をはらんで、舟は忽ち中央に滑り出た。其邊から男體の最もすぐれた姿が見えた。地理部の人は水の温度を計つた。

菖蒲浦に着いてから、養魚場を見て、やがて湯本へと道を取つた。少し上つた所に、日光の瀧の中でも異觀を呈してゐる龍頭の瀧があつた。そして道がその長い瀑に沿つて、爪先上りに戰場が原へと行つてゐる。白樺の若い木の幹が際つて美しかつた。「勇士が力んでゐるやうだ」と誰か云つたが、鋭い枝の様子をした落葉松が多かつた。戰場が原から見た二荒山群は異彩を放つてゐた。女峰はや、後になつて見えぬが、大真名子、小真名子、太郎山の一群は、手に取るやうに見えた。

な舊道をも驅け下りた。

菖蒲浦から中禪寺までの道がよかつた。片方は紅葉の山、片方は湖に沿つてゐる道で、紅葉を見るには此邊はもう後れてゐるが、落葉の積つた上を踏んで行くのもよかつた、やがて向ふに沈んだ夕日の殘光が、波にちらついて暗紫色の湖面を流れ、氣韻の籠つた詩趣は、全く我々の魂を奪つた。旅館に着いた頃は、日はとつぷりと暮れて夜霧がこめてゐた。

明日は地理部の人は足尾へ、歴史部の人は町の方へと別れ別れになるのである。皆は土産物を買つたり、繪葉書に音信を書いたりして、中禪寺の名殘の夜を賑かに過した。

二十九日、歴史の者は自由行動。立木の觀音詣うで。

「これで皆な起きたかしら？」「あそこに寝てゐるのは歴史の方でせう。」「おこしませうね」

四時半起床、五時出發と昨晚寢る時は立派に豫定をたてておいたけれども、今朝となつて見れば、五人の人が揃つたのは六時も近い頃であつたらう。湖に沿ふた山路は、紅葉の落葉に霜が下りてゐた。

戰場が原の中央に、松が三本立つてゐた。三本松と云ふので、其處に茅屋が一軒あつた。此で道が左右に分れ、湯本への道は左の方であつた。そして行くにつれて、遙かに白く湯瀧の掛つてゐるのが見えた。

湯瀧の茶屋に着いた頃には、かなり疲れた人も有たので、此から引きかへした人もあり、勇を振つて湯本まで行く人は、十七人許りであつた。

湯瀧の上から湯の湖を見た感じは、實に超越した静かなものであつた。何の音もない、湖畔の落葉の路を、静かに一行は行つた。そして思ひがけもなく早く、湯本の家々を見出した。其處へはもう、硫黄泉の香がただよつて來た。

しんとした、静かな温泉場である。設備も山の奥としては、よくできてゐて、實によい氣持で、お湯に入り一時間ばかりを此處で過した。

三時に此處を出て、今度は、中禪寺まで歩くのである。菖蒲浦までは、先と同じ道である。戰場が原で、皆は白樺の皮を取つた。時は既に薄暮に迫つてゐた。一行は道を急いだ。熊笹の間をわけて、急

湖をめぐる山々には朝日の影がさしてゐた。一行は見えもなく襟巻をキューと首に巻いて、赤い鼻尾の太い宿屋の下駄をはいていそぐ。正直に早くおきた連中が歸つてくる頃、落ちついた寢坊の連中とすれちがふ。「君等のおそき事何を甚しきや」と云へば「君等の待つ事何を甚しきや」とやりかへす。ほんとに遅い連中が歸つて來ても、早い組の人々はまだ御飯前であつた。勝道上人の刻まれたといふ立木の觀音様には、昔の人の厚い信仰の貴さに思はず膝まづく。一つの信念が満ちあふれた時、どうしたつて何か形にあらはしたくなる。何のかんのと理窟は知つていても、あたりの崇高な感に誘はれ、ばお辭儀もしたくなる。人の理性が發達した時人はこんな感じを藝術にもとめるのであらう。日光の御廟の案内者の流暢なのにくらべて、こゝのは、上目をつかつて暗誦して折々つかへるのもいぢらしい。

五郎兵衛茶屋行き。

華嚴、華嚴といくたびか思ひ考へても、頂上から瀧壺までの道について、ついぞ夢みた事もなかつた者には、この坂道の苦しさ、足は昨日の湯本行きで

疲れてゐるのに、道の險しさは不意うちである。瀧壺に来て見れば、「来て見ればさほどでもなし」といふのは山ばかりではない。しかし登つて見なければ山の高さはほんごに知り得ない。飛びこんでみなければ、眞の瀧の偉大さも知り得まい。

霧降りの瀧見物。
今度こそ瀧に出るだらう、と幾度か思つた事であらう。山は行けども行けども水音もしない。ほゞけた薄原のかなたの杉の森も、紅葉の山の間に見える。遠くの雲の山もうれいものであつた。日はうす曇りして山は静か、その中を一行は、りんごを摘んだり、野菊を折りながらゆく。早い人と疲れた人との間には一丁ほどの隔りがある。細田先生は遅れた人を待つては千鳥足の御講義をなさる。瀧を見晴す茶屋についたのは二時間も歩いた後であつたらうか、茶屋からは、丁度、瀧の真中だけ見える、瀧に脊を向けてお辨當を使つて、五分程ながめてもう歸り仕度をはじめ。隣りのあづまやには、細田先生の所謂、ゼニトラレマンがゐた。その人たちは、瀧壺に下りるとよろしいと日本語でいつた。細田先生は

うです。

○ 中禪寺湖の西岸に舟を乗りすて、から、低い峠を一つ越すと、早、足尾の町のけぶりが見える。もや／＼としたうすい緑色のけぶりが低く山間をへめぐつて居る。山には草も木も一本もない。ちつとその山にむかつてゐると泪がちんで來さうになる。

○ 置物のやうにならべた日光や、油繪のやうな中禪寺湖によつた心をもつて、煙つたこの鑛山町に這入つた時、急に或る現實の尊さがしみ／＼と感じられてきた。

○ 「やい女のくせに眼がねなんかかけて居やがる、なまいきだなあ、おい／＼あどの奴は二つもかけて居るせ。」

足尾の町を通る八人の一行を、いま小學校がへりの子供らが兩側に列をつくる様にならんで、物めづらしさうにながめて居る。

「瀧は華嚴が一番よろしい、霧降りに霧がなければだめです」と會話をなすつた。一行は、茶屋の裏から取つた黄菊を、はる／＼こゝまで來た優勝旗にと髪にかざして、また／＼と坂を下りた。

日光小學校
霧降りにゆく道に、日光小學校によつて荷物をあづかつていただいた。瀧から疲れた足をひきづつて又、この應接室に來たのは二時もすぎたか、兒童も歸つたあとで學校はきれいに、掃除せられてあつた。學校の歴史も成績も一間に示したこの室で、茶を戴きながら、細田先生から、勝さんの書かれた「千里行者」の額についてお話を伺ふ。

これで日光見物も終つて一行は停車場へといそいだ。
中禪寺湖から足尾へ
文三 地理部生
すつきりすみきつた中禪寺湖をみつめてゐますと、人間の殻を脱して、水底にすひこまれてゆきさ

「素通しだらうせ」すぐわきの子供がさゝやいた。

○ 夜、繪葉書を買ひに宿を出ると、眞黒い山が闇の中に歴しかぶさるやうに目の前に迫る、「おゝ怖しい」と云つて後を向くと其處にも又もつと大きい山が大入道のやうにつゝ立つて居るので進退谷まつてしまつた。

足尾は山の町である。

○ 夏目さんの坑夫が長い前から此處の人々と私とを結びつけてゐた。

霧の深く立ちこめた硝子戸の外をつゞいてゆく坑夫の一人／＼になつかしく眼をそゞぎながら、大輪の菊のかざられた鑛山の事務所の一室にゐるといふ事が夢のやうに思はれた。

○ 朝霧にうすしめりせる土ふみて坑夫語らすゆくがさびしき
うちむれて霧の中ゆく坑夫らのその足音もさびしかりけり
銅をやく烟も交り赤埴の山ほの霧ふ秋の朝かな